

公園の管理事務所には鍵がかかっていたが、優美は、ヘアピンで鍵をあける名手だった。とりあえず、鞆丸が潰れてしまった小男を管理事務所に運び、床に寝かせた。

眼鏡の青年は松野というトレジャーハンターだった。長年、宝探しを続けてきたが、なんの収穫もないまま職を失った。家族などいるはずがない。大鳥山の宝石の件を聞きつけた彼は、これが最後のチャンスと意気込んでやってきた。途中で金が尽きたが、執念で歩いてやってきた。

三日前、松野は無人駅のベンチにくるまって寝ていた。そこに亜紀が現れた。ともに文無しの宿無しということで話し込んでいるうちに、うっかりと大鳥山の宝石の話打ち明けてしまった。翌朝、目を覚ますと、金属探知機と地図が無くなっていた。もちろん亜紀の姿も消えていたのだ。

「ね、ひどい話でしょ」

松野は興奮していた。

「話をしているときは、そうなの、すごいね、がんばってね、応援するね、なんて言ってくせに、なんのことはない、僕からお宝を横取りしようとしたんですよ」

「当たり前じゃん」

亜紀はうそぶいた。

「そんな大事な話、見ず知らずの他人に話すおっさんが悪いんだよ」

「なんだと！」

「わかったよ。どうせ、宝石は探知できないっていう話だし、いらないよ、こんなもの」

「こんなものとは、なんだ！」

「うるさい！」

目を覚ました小男が唸った。

「……頭ががんがんする……、吐き気がする……、静かにしてくれ……」

「どうでもいいけどさ」

優美が小男に訊ねた。

「なんであんたも大鳥山のお宝の話を知ってるの？」

「あのお宝は俺のものなんだ」

「なんでよ？」

「あの宝石は、俺の親父が埋めたものだからだ」

小男は、柏田という名前だった。父親が警官隊に包囲されて死んだときは、まだ生まれたばかりだった。母親はすでに遠い地で別の男と結婚していたため、自分が強盗犯人の息子だとは知らなかった。それを知ったのは、半年前、母親が死んだときである。今は実際に本当の父親について言い残された。

「だから、その宝石は俺が相続すべきものなんだ。アカの他人には触らせやしねえ」

苦しい息の下で呻く柏田に、若菜が呆れたように言った。

「よく言うよね。だいたい、あんたの親父が、人から盗んだ宝石じゃない」

「そうだよ。落とし物だって、半年たちや、半分は拾った人のもになるじゃない。早く見つけたものの勝ちだよ」

亜紀も口を添えた。だが、柏田はにやりと顔を引きつらせて笑った。

「いいのか。俺は知ってるんだぞ。宝石が、あの山のなかの、どこに隠してあるか」

「どこだよ？」

「言わねえよ」

「なんだと、この親父！」

亜紀がいきりたった。

「若菜、もう一回、拷問してやろうぜ」

「よしなって」

優美が言った。

「それ以上、玉蹴ったりしたら、ほんとに死ぬよ」

二人は歯噛みして座り込んだ。

「あの……こうしたらどうかかな」

松野がおずおずと口を挟んだ。

「ここで見がみあつていても仕方がない。我々五人、協力して探すつてのは。見つかったら、文句なしに山分けということ……」

「五人？」

優美が言った。

「言つとくけど、私は協力する気はないよ」

「あ……四人でもいいんですけど……。つまり、柏田さんがいないと正確な場所が分からないけど、柏田さんは体がこのとおりです。僕は宝探しのノウハウは知っているし、あなたがたも困りのようだから、手伝っていただければ助かることは助かるし……どうです？」

若菜と亜紀は顔を見合せた。

「どうする？」

「うーん……まあ、そーだねえ。いちばんいいかもね」

「柏田さん、どうです？」

松野は柏田の顔を覗き込んだ。

結局、松野の案に賛同するしかなかった。柏田は、賛同のかわりに病院で治療をさせろ、と主張した。四人は彼を病院に運ぶことにしたが、運ぶ手段は優美のバンしかない。

「運んでやるけどさ……そのかわり、病院に着いたら私はすぐ出発するからね」

優美は言った。運転者の金玉を潰して奪ったバンなのだ。そろそろほかの車と取り替えないと、足がつく。

翌朝、隣町まで走って、怪しげな外科医院の前で四人を下ろし、挨拶もせずに出発した。

人けのない町外れまで出たとき、ふと、道端に無人の自動車が置いてあるのが目に入った。あれに乗り換えようかな、と思いい、優美はバンを停めた。

自動車を覗き込んだ。キーは抜かれていた。舌打ちして再びバンに乗ろうとしたとき、道に近い竹藪から悲鳴が響いてきた。続いて、口汚く罵る声。その声に聞き覚えがあった。

優美は竹藪をかき分けて入っていった。

「ぎゃっ！」

またしても悲鳴。背の高い少女が、目の前に立つ若者の股間を蹴りあげていた。少女の足元には、股間を抑えて悶絶する若者が二人、転がっていた。少女は、股間を抑えて体を前屈みにして若者にとびかかり、顔面を膝で蹴りあげた。若者の鼻孔や口から血が吹き出した。少女はさらに、若者の股間に二度三度、膝蹴りを浴びせた。若者はぐったりとなって地面にくずおれた。

少女は、くずおれた若者のポケットを探り、車のキーを探りだして、「みつけ！」とはしゃいだ。ジーンズの短いパンツで長い脚を剥き出しにし、胸ぐりの深い白いＴシャツで豊かな乳房の谷間を見せている。日本人離れした、めりはりのある体型とうらはらな、愛くるしい童顔……。

少女は顔をあげ、優美を見た。「あつ」と叫んだ。江梨だった。

「優美……！ こんなところで……」

江梨はわっと優美は飛びついた。優美は当惑した。

「ちよ、ちよつと……」

「優美……聞いて、大変なことになっちゃったんだよお」

「大変？」

「慎司が、慎司の奴、連中に捕まっちゃったんだよ……」

慎司は、江梨の二歳下の弟である。

「どういうことなの？ 説明して」

江梨は説明した。優美と江梨が鞆丸を潰した暴力団組長の手下たちが、江梨の携帯電話に連絡を入れてきた。弟は預かった。一週間以内に姿を見せるか、さもなくば現金一億円を用意しろ、と伝えてきたのだ。

「一億円なんてムリだよ……でも、あいつらの前にいったら殺されるか、売りをやらされるかどうかにか決まってるし……でも、慎司は助けたいし……」

江梨は泣きじゃくった。

「でも、たった一人の弟の命にはかえられないもん。決心して東京に戻ろうとしたんだ。そのと

き、いい話を聞いたんだよ」

「いい話？」

「うん。一億円、用意できるかもしれない」

「一億円も？」

「うん。なんでも大鳥山つととこにき、時価数十億円の宝石が埋まってるんだって」

優美はやれやれと顔を顰めた。

「なによ」

「それ、五十年前に、警官隊に追い詰められた宝石泥棒がもってたって奴？」

「なんで知ってるの？」

老外科医は話のわかる人間だった。

事情など聞かずに運び込まれた柏田を手術した。潰れてしまった鞆丸を摘出し、陰囊を縫合して「入院するか？ 個室が空いているが」と訊ねた。亜紀と若菜は「私たちも付き添いたいんですけど」と言った。松野も含め、三人とも文無しだった。柏田はかなり所持していたが、絶対に渡そうとはしなかった。老外科医は面倒臭そうに、「布団などないぞ。あまり騒ぐんじゃねえぞ」ただけ言った。ほかに入院患者どころか外来患者もいないようだった。

麻酔から覚めた柏田は、病室にもかかわらず平気で煙草をふかしている亜紀と若菜を見て、「あ

のねえちゃんはどうした？」と言った。

「え？ 優美のこと」

「そうだ。最初に俺のタマを蹴ったあの女だ」

「行っちゃったよ。お宝には興味ないんだってさ」

「なんだと……ううむ。そいつは困ったな」

「なんで？」

「優美というのか？ あのねえちゃんは強い。そうとう喧嘩慣れしてる。そこらのチンピラなど、とうてい歯が立たないくらいだろう。修羅場をくぐってきた俺がそう言うんだから間違いない」

「知ってるよ」

若菜は得意気に言った。

「私の目の前で、ヤクザ二人、あつという間に不能にしゃちったんだもん」

「そうか……。それに比べれば、お前さんらがやったのは、ただのイジメだ。失神していた俺を縛りつけて、いじめただけだ。まともに男と喧嘩などできそうもない。だから、あのねえちゃんがいてくれたら、心強かったんだが」

「そりゃそうだけどさ」

亜紀が口を尖らせた。

「行っちゃったもん、しょうがないだろ。お宝は興味ないっていうし。私たちだって何度も頼ん

だけど、行くなってきかなかったんだから」

「そのことだよ。そのお宝なんだが……」

柏田が口を濁した。

「ちよいと、まずいことになってるんだ」

「なによ」

「お前さんら、コスモって覚えてるか？」

「コスモ……さあ」

「一年前、新興宗教団体の教祖が麻薬所持で逮捕されたことがあったろ」

若菜と亜紀も思い出した。コスモという団体は、地下鉄に有毒ガスをばらまき戦後最大のテロ事件を引き起こした教壇と、よく似た宗教団体だった。信者たちは教祖の絶対服従下に置かれ、施設のなかで洗脳され、厳しい「修行」を強要された。ただ教壇の規模が小さかったのと、冒した犯罪が麻薬所持だけだったので、世間はすぐに事件のことを忘れてた。教壇も、穏健派が実権を握って教祖との絶縁を宣言し、解散宣言をして看板も改めた。多くの信者たちは教壇を離れ、今ではほそぼそと「霊的生活」を送るだけの小さな集団でしかない。

だが、かつての武闘派信者たちは、穏健派と対立して分派を作った。教祖には二人の娘がいた。教壇施設内でわがままに育てられ、性格もそうとう凶暴らしかった。彼女たちに引きずり回されるかたちで、武闘派信者たち二十名ほどが行方をくらました。

「そいつらがな……親父が宝石を隠したあたりに、根城を作ってるっていうんだよ」  
「ほんと？」

「間違いない。噂を聞いて、俺は近くまで行ってみた。山のなかに閉鎖された擁護施設の建物があってな、そこに住み着いている。あたりを、人相の悪そうな連中がうろついてたよ。信者といつても、もとはヤクザや右翼、少年院あがりの穀潰しばかりらしいからな。そんなところで、お宝を掘っていて、見つかつてみる。怪しまれて、事によってはお宝全部横取りされた挙げ句に殺されないとも限らん。連中も資金が底をついて、困ってるだろうからな」

「そっか……。なるほど、たしかに優美がいたら、頼りになりそうね」  
「だろ？」

「どいつでも今から追っかけるたって、どこに行っちゃったかわかんないし」

三人は黙り込んだとき、ドアが開いた。三人はいつせいにそちらを見た。若菜と亜紀が立ち上がり、ドアに向かって突進した。

「優美！」

優美に抱きついた二人の少女を、後ろで江梨が呆れたように見つめていた。

「私の分け前はいらなからさ。そのぶん江梨にやってほしいんだよ」  
という優美に、若菜と亜紀は一も二もなく同意した。

「うんうん、もちろん。ただ、相手は二十人以上いるらしいんだよ。大丈夫かな」

「二十人相手するのは私も経験ないけどね。最高記録で六対一だから……。ただ、江梨もそうとう強いよ。さつき、ちんぴらを三人、不能にしたばかりだから」

「えー、よかったあ。頼りになる人が二人になったよ」

「まったく、近頃の若い娘ときたら……」

ベッドで柏田がうめいた。

「そんなに男のタマを潰すのが好きなのか？」

「おっさん。あんたのも潰れてるよ」

優美かそっけなく言った。柏田の目が見開かれた。

「なんだと！」

「だから、彼女たちが二つとも潰しちゃったの」

柏田は顔を硬直させ、そのままベッドにどさりと倒れた。

「この役立たず！」

いきなり股間を蹴りあげられ、青い修行服を着た若者は、股間を両手で抑えて床につつぶした。彼とともに並んでいたもう一人の青服の顔がおおざめた。

「どいつもこいつも……ガキの使いじゃないんだからさ、手に入らなかったじゃすまな

いだろ。おい、お前、手をどける」

思わず股間を両手が覆っていた青服が、泣きそうな顔になった。胸を大きくえぐった白いワンピースに、教壇最高指導者の地位を表す紫のシヨールを羽織った少女は、彼の前に立ち、膝を叩き込んだ。青服は呻いて床に膝をついた。

「早坂！ お前の教育が悪いんだぞ。分かってんのか？」

「は……はい」

早坂は冷や汗を垂らしながら頷いた。

「よ、よく言いつけておきますんで……」

「だったら、さっさと行け！ 早く、持ってくるんだ」

二人の青服は立ち上がりとしたが激痛で立つこともできず、這いながら部屋を出ていった。

早坂も一礼して部屋を出た。

コスモ教祖の長女。ホーリーネームはイシス。十七歳。中肉中背ですらりとした四肢に、豊かな乳房。顔だちは年齢のわりには大人びた色気があったが、同時に、深い陰のようなものが漂って、凶暴な性格を表していた。

——まったく、親父以上だ。この凶暴さは……。

早坂は三十七歳。元は暴力団の幹部だった。暴対法制定以後、うまく生き残れずに没落した組に見切りをつけ、コスモに入団したのは三年前。権力欲のみが肥大化した教祖に、麻薬の商売の

ノウハウを教えたのは早坂だった。

彼が警察の検挙の網を逃れここまで逃げてきたのは、どちらかというと父親の後継と目されていたイシスに無理やり連れてこられたといったほうが正しい。イシスは、暴力の天才だった。二十歳も年下の彼女には、早坂も恐怖を感じていた。自分に逆らった信者を半死半生にしたこともある。気に入らないと、すぐに股間を蹴る。女の信者は乳房を殴りつける。相手の急所を痛めつけるのだ。ただ乱暴なばかりではない。一度、お忍びで街に出て、不良四人組にレイプされかけたが、逆に四人の睾丸を潰して病院送りにしたこともある。ここに連れてこられた「武闘派」信者二十二人、いずれもイシスに股間を蹴られた経験のない者はいない。

イシスは不機嫌なのは、資金が底をついて食べ物や質が落ちたこともある。資金の枯渇を聞いたイシスは、突然、武器を集めて現コスモの施設を襲撃し、資金と施設を乗っ取るうと言いついた。早坂は計画の無謀さに啞然としたが、逆らえば、股間を蹴られるだけではすまないのは分かっていた。現に、ここに移ってから三人の信者が睾丸を二つ潰され、全裸で放り出された。

——早く逃げたほうがいい。それは分かっているのだが……。

だが、彼ほどの極道が逃げることでできない。恐怖によって縛りつけられたも同然なのだ。睾丸を潰された三人のうち一人は、逃亡をはかった信者だった。すぐに発見され、連れ戻された。信者たちは、早坂の命令よりも、イシスの命令に従うことは分かっていた。

ふと、廊下の向こうから、イシスの妹、ホーリーネームはイシユタールがやってくるのが見え

た。十五歳。姉と違い、ふっくらした顔だちで目が大きく、愛嬌がある。だが、その凶暴さと残忍さは姉に劣らない。小柄だが、大きな胸とそそる肉体の持ち主だ。

イシュタールは、股間を庇いながら廊下を這う二人を見て、けらけら笑った。

「また、イシスに蹴られたの？」

「は……はあ」

早坂はうなずいた。イシュタールは早坂の前に立ち、その耳をつかんで言った。

「早く言うとおりにしないと、潰されるよ」

言うなり、イシュタールは軽く膝を蹴りあげた。まともに早坂の睾丸に命中した。早坂は、こみ上げる激痛に膝をつきそうになったが、流石に我慢した。

イシュタールはまたもけらけら笑いながら、姉の部屋へと入っていった。

「よ、イシス。機嫌悪そうじゃん」

ソファに座って険しい表情のイシスに、イシュタールはからかうような声をかけた。

「虫の居所が悪いからってあいつらのタマ蹴ってたら、そのうち、タマついた信者はいなくなっちゃうよ」

「うるせえ」

イシスは吐き捨てるように言った。

「呑気なこと言ってるんじゃないよ。知ってるだろう？ 金がないんだよ、金が。どんな方法でもして金を手に入れないと、どうしようもなくなっちゃうんだから」

「そーいやさ。さっき、こんなもんめつけたよ」

イシュタールは掌を広げて差し出した。透明の、きらきら輝く石のかけらが乗っていた。

「なによ、それ？」

「さっき、散歩してたらさ、こないだの雨で崖が崩れてたじゃん。そこに落ちてたんだよ」

「どーせ、ガラスかなんかだろ？」

「そーでもないんだなあ。さっき、これでガラスをひつかいてみたの。きれいに切れたよ」

「え」

イシスは体を起こした。

「ま……まさか、ダイヤ？」

「そーみたいなんだよねえ」

「なんで、そんなとこにダイヤが？」

「わかんない。崖崩れの跡だから、埋めてあったものかもね」

イシスは静かに立ち上がった。

「もつとあるはずよ……」



柏田は、どうしてもすぐに行く、といって聞かなかった。

「無理ですよ」

トレジャーハンターの松野が止めた。

「そんな体で……もう少し寝てなきや」

「場所さえ教えてくれれば、私らが掘ってきてもいいんだよ」

亜紀が言った。柏田は首を振った。

「信用できるもんか。わしは行くぞ。わしが行かなければ、お前さんなんかには絶対に見つかりはしないんだから」

江梨が不安そうに優美に囁いた。

「なんか……仲悪そう。大丈夫なのかな」

「さあ……。でも、いまはこれに賭けるしかないんじゃないの？」

六人は江梨が奪った自動車に乗って大鳥山に向かった。途中、幹線道路を外れて林道に入った。道は杉林の途中で途切れた。六人は車を乗り捨てた。

結局、松野が柏田をおぶって歩く羽目になった。

一日で着ける距離ではなかった。六人は野宿することになった。持参したテントを二つ張った。

松野は柏田と、少女たちは四人で一つのテントに寝るのだ。

夜更け、ふと眼を覚ました優美が起き上がってテントを出ると、松野が焚き火の側で考え込んでいる様子だった。松野は顔をあげ、「やあ」と笑った。優美は彼に向かい合って腰をおろした。

「協力してただけて、ありがとうございますよ」

松野は人の良さそうな笑顔を浮かべて言った。優美は返事をせず煙草に火をつけた。

「明日には着くそうですからね……長年の夢がかなって感激です」

「見つかるかな」

「間違いないです……。でも、ほんとに分け前はいららないんですか？」

「いらないよ」

「変わった人だなあ」

松野は屈託なく笑った。優美は不思議そうに松野を見た。今まで出会った男のなかでも、これほど邪気を感じさせない男はいなかった。たいていの男は、まず優美の乳房に見とれ、股間を勃起させ、下心をもって接してくる。それほどの度胸がなくても、体のなかで暗い性欲が渦巻いているのは間違いなかった。

だが、松野は違う。優美に、まったく女を感じている様子がないのだ。

「あんたも変わってるね」

「そうですか？」

「うん」

「まあ、トレジャーハンターなんて、変わり者と思われても仕方ないけど」

「そうじゃなくてさ……」

優美は説明しようとして、面倒臭くなってやめた。うっかり喋ってこの男が変な欲求でも催すものなら、また玉を潰さなくてはならなくなる。この男の宝探しの知識は必要だった。江梨に億単位のお金をゲットさせなければ、江梨の弟が危ないのだ。

ところが、松野のほうから話し出した。

「僕ねえ……柏田さんと同じなんですよ」

「え？」

「不能なんです。子供のころ、女の子に股間を蹴られて、それ以来、勃起しないんですよ。素敵な女の子を見ても、なにも感じないんです」

——なるほど……。

合点がいった。勃起しない男とは存外便利なものかもしれない。面倒が起こらずにすむ。

「女の子だけじゃないんです。人間というものに、なんの興味ももてない。ただ、きれいな、ぴかぴかするものだけに惹かれるんです。たしかに変な人間ですよねえ」

「寝ないの？」

優美は訊ねた。自然に口調が和らいでいた。

「もう少し起きてます。興奮しちやつて……眠れそうもない」

翌朝。日の出とともに六人は起きた。亜紀や若菜は、足が痛い、とか、腰が痛い、とか不平を鳴らしながらも、リュックを担いで歩いた。

松野に背負われた柏田は、傷口が痛むようだった。熱もあるようだったが、なんとしても父親が残した莫大な財宝を手に入れずにはおられないという執念が、彼を支えていた。

昼過ぎ、六人は谷川のほとりで休憩した。持参した缶詰を開け、パンと一緒に食べていると、柏田が言った。

「あと二十分も歩けば目的地だ。誰か偵察にいつてくれんか」

柏田の視線は、優美と江梨に向けられていた。コスモの残党に遭遇した場合、切り抜けられるだけの腕を持っているのは、彼女たちしかない。

優美は立ち上がった。

「私がいつてくる」

茂みの向こうに、大きな沼が広がっていた。沼の向こう岸は崖になっていて、崩れた跡があった。その崖崩れの跡に、青い服を着た男たちが十人、手にシャベルなどの道具を持って何やら作業をしていた。作業を見守っている白い服の女が二人いた。

——あれが教祖の娘たちか……。

優美は茂みに身を潜めてじつと様子を見守った。

「休んでるんじゃないよ！」

いきなり背後からイシスに股間を蹴りあげられ、青服がうめき声をあげて突っ伏した。イシユタールがけらけらと笑った。彼女の足元に、腐りかけた籐の袋が置いてあった。袋には、ぎつしりとダイヤが詰まっていた。

前日、イシユタールがダイヤのかけらを拾ったという知らせを聞いたイシスは、信者たちを動員して発掘作業に当たらせた。そして、今朝、ダイヤ入りの袋をひとつ発見した。言うまでもなく、柏田の父親が埋めたダイヤであった。

イシスは、その成果に満足しなかった。まだあるはずだ、と言い張り、作業を続けさせていた。信者たちの掌のママが破れ、慣れぬ土木作業に傷を背負っても、イシスは容赦しなかった。少しでも休む気配を見せた信者たちには、股間蹴りの懲罰が待っていた。だが、ダイヤは一袋だけで、出てきそうな気配はまったくなかった。イシスは金切り声をあげ、ふらふらになった信者たちの股間を次々と蹴りあげた。とうとう、信者たちは全員が地面に突っ伏し、動かなくなった。イシスはなおも、「起きろ、寝るな」と信者たちに蹴りを入れた。

「あ、あの……」

早坂がおずおずと言った。

「もう限界です……みな、休ませたほうが」

「うるせえ」

イシスは早坂の股間を蹴り上げた。早坂は呻いて膝をついた。イシユタールが助け船を出した。「とりあえず、見つかったぶんだけでも持ちかえて、ちゃんと保管しといたほうがいいんじゃない？ こいつらもうふらふらだし、交代させたほうが効率よくなると思うよ」

「そうだな」

イシスは渋々うなずいた。

「わかった。じゃあ、五人残って作業を続ける。イシユタール、あんたも残ってこいつらちゃんと監督しな。他の五人はダイヤを運べ」

イシスは、早坂を含む五人の信者と、ダイヤの袋を引き入れて、現場から去った。イシユタールは残った信者たちを見て、微笑みながら言った。

「休みたいんじゃないの？」

信者たちは顔をあげた。かすかな希望を感じ取ったような顔つきだった。

「や……休みたいっす……」

一人の信者がやっと声を出した。イシユタールはにっこりし、いきなりその信者の顎を蹴りあげた。信者は口から血を吹いて仰向けに倒れた。

「ばーか、ちゃんと働け」

成り行きを見守っていた優美は、事態を理解した。宝石は、おそらくもう残ってはいないだろう。それはコスモの残党たちの「施設」に持ち去られた。奪い返すしかない。奪い返すには二つのやり方がある。実力行使か、交渉か。相手は二十数人。頼りになるのは江梨だけ。それだけの人数を相手に実力行使が可能かどうか、優美にも確信が持てない。交渉するしかないが、ただ「宝石を返してくれ」と頼んだところで相手が応じるはずがない。こちらが有利に交渉を進めるカードを手に入れなければならない。

となれば手は一つ。

優美は茂みを出て、音をたてないように、崖崩れの跡に近寄っていった。

「ぐっ」

隼丸の痛みをこらえながら必死で作業を続けていた信者たちは、背後で呻き声を聞いた。振り返ると、イシュタールが股間を両手で抑え、体を前かがみにしていた。背後に、女が立っていた。女は高く手を振り上げ、イシュタールの後頭部にうち下ろした。イシュタールは昏倒した。

優美が、イシュタールの背後に忍び寄り、股間を蹴りあげ、気絶させたのだ。

信者たちは咄嗟に事態を飲み込めず、呆然と突っ立っていた。優美は、その一人に駆け寄り、股間を三度四度、膝で蹴りあげた。信者は苦痛に顔を歪め、口から血反吐が噴き出した。優美は、

くずおれた信者の顎を蹴りあげて仰向けにし、股間を踏みつけた。隼丸が潰れ、陰囊が避け、青い修行服の股間がみるみる赤く染まった。

「て、てめえ、誰だっ！」

一人の信者が叫んだ。優美はにやりとして失神しているイシュタールに顎をしゃくった。

「彼女は貰っていくよ」

「なんだと！ そうはさせるか？」

「おやおや、こんなひどい扱いをされながら、まだ忠誠心を持つてるわけ？」

二人の信者が顔を真っ赤にして、手にしたシャベルをふりかざして突進してきた。優美は、真先に突っ込んできた信者をひらりとかわし、もう一人の懐に飛び込み、股間を三度蹴りあげた。取り落としたシャベルを奪い、脳天にふりおろす。信者はうつ伏せに突っ伏し、動かなくなった。もう一人が、凄まじい形相で体勢を建て直して突っ込んでくる。優美は、ふりおろされたシャベルを、がっしとシャベルで受け止め、爪先で股間を蹴った。相手は、股間を両手で抑え、顎をのけぞらせた。優美は、その鼻先にシャベルを叩きつけた。相手の鼻柱が折れ、歯が砕けた。顔中を血で染めて、相手は仰向けに倒れた。優美は踏み込んで、その隼丸を踏み潰した。

残る二人は戦意を喪失していた。腰を抜かし、あわ、あわ、とわけの分からないことを呟き、涙を流しながら、四つん這いで逃げ出そうとしていた。優美は、一人の襟がみを掴んで立たせてこちらを向かせ、ぎゅっと股間を握った。信者は顔を左右に振って泣きわめき、激痛に身を振つ

た。優美はさらに力をこめ、ひねり潰した。信者は蛙のような声を出し、へなへなとくずおれた。

残るは一人。優美は体がかがめ、四つん這いになった男の股間に背後から手を差し入れ、ぎゅつと睾丸を握ってひねりあげた。信者は悲鳴をあげ、「た、た、たすけて……」と泣き叫んだ。

「お願いです。許してください。つ、潰さないでください」

「じゃあ、一つ教えて。どうしてダイヤがここに埋められていることが分かったの？」

「そ、それはイシュタール様が……」

「イシュタール？ この娘のこと？」

「そ、そうです。イシュタール様が、ここをお散歩中に、発見されたんだそうです。それで、姉君のイシス様が……ここを掘れ、と命じられて」

「ふうん。偶然なのか」

「そ、そうです」

「イシュタールにイシスね。わかったもういいよ」

「は、はい……」

「あんたはもう用なし」

優美は、さらに強く睾丸をひねった。信者は身を振り、叫んだ。

「や、やめてください。正直に話したじゃないですか！」

「誰も、正直に言ったら潰さない、なんて言っていないよ」

優美は顔色ひとつ変えず、睾丸をひねった。睾丸が指と指の間で平たく変形し、やがてぺしゃんこに潰れた。信者は苦痛に歪んだ表情のまま、血反吐をはいてくずおれた。

優美は立ち上がった。いま、睾丸を潰したばかりの信者の脚と脚の間で、血溜まりが出来ていた。優美は、指をその血で濡らし、崖崩れで剥き出しになった岩になにか書きつけた。それから二人の信者のベルトを外し、昏倒したままのイシュタールの両手と両足を縛った。そしてひよいと肩にかついでその場を立ち去った。

あとには、破裂した陰囊から血を噴き出し、半死半生の五人の信者が残された。